當流大全湯流傳集　五

444

當流茶之湯流傳集巻之五目録

客振三拾ヶ条之習
亭主振四拾六ヶ条之習
唐より日本へ茶子渡る事
日本古来より茶之湯名師之事
茶之出生
茶を食物に随一とする事
宇治之茶之栂と云事
濃茶極上と薄茶別儀と云事
宇治の極上を手一と云分毎の分
四通く手之摩義に事

數寄屋圖ニ品此分
長板の奥
風爐の奥
井桁の奥
引竹の奥
一疊半の奥
圍炉裏の奥
角棚の奥
三疊大の奥
炉比角を切の奥
袋棚の奥

懸物の奥
茶之湯よ墨跡をかくる奥
四幅一對三幅一對之奥
春日卓の奥
床よ花を生る奥
薄板の奥
茶入の奥
天目の奥
茶碗の奥
茶杓の奥
頭切の奥

棗の具
茶入の成に文琳と云名に付く古事
其の手補釣瓶の水指の具
猿戸の具
石燈籠の具

客振之絵四ケ条之習

一茶入之様に三つある 常の時は水指の前に置する
時之儀 茶碗には茶筅 水指へ上る時之菓子の
時ハ蓋置の菓子へ上る時之あり

一濃茶飲(ノミ)ふる時ハ先にてしく支度(ロクロ)を見(ツノニ)
する座の者に茶を下ス時 何方も茶碗
にあまりたる由へ安く戴(イタヾ)く也 其を世にて
らひ之ある支ちく あと先にてつく也

一冬ハ炉の茶をのむ時 若(モヽ)羽(ハ)織(オリ)を着(キ)て居
申して羽織の胸(ムナ)紐(ヒモ)をとき 戸にかゝへ入
申時ハ羽織をぬぎ置て入よしがよき事也

一亭主濃茶を點る時ハ脇床をぬきてその
目にたゝざる花を生るが善しといへども
花して活るもの也
一上下ハ新客ハ茶の湯の時ハ悪し古流ハきはめて上
下ときたるがよし
一路地の花ハ氣を付て水に洞をき花など付たる
上をのむ也又大きに出し飛石の上をぬむが善
石燈籠ハそばへ寄てよまざる也又目によるが
よき也又を山をとる路地には必ず花を付
つし又額などかけるハ心を付べし猿
ことくさまて見るハあしく人にしひて見ル

花生にハ一歳又数寄屋の角柱に漆の花生などのあり
色のものを受にまき付るもよし又生花
花るにハよく花葉の数を見て大小同也
一或ハ
茶入を目と付て茶に向ひ點前げ様子にて花を
茶の湯若ハうりに居るもよろしく立てかけたる姿
上段も上段活きる事あり人ハ中段下段に真延ハさまを
一中段ハ段をさ上段下段中程に居る
活段生きハめ道ハ上段はさるまゝ
なる又下段ハ花に活もふさる様に活人に
よく活る役に手を上段と下段様合に活る

故に上戸は志そこなひ下戸の酔(ゑひ)になる
一 而して上戸は肴につき餅(もち)に居る人毎肴へつく
くいつき也されどさぞへかさつき居るべし
一 酒(しゆ)食へ入る者日比(ひごろ)何(なに)人と云ふ事を知らバかきの
数ある知るなり
一 酢飯は雪酒ノ躍(?)なれバ又ハ客の餌(ゑ)くハれ此おけ
よあるは合けのさきと取てけ五勘と取てつぎ
けのまへと一口含トに置含とれるひ後悔(?)
よるひると酢飯や餅がくれおハてへいまだあらさる
物語りける故也
一 或此分

酒ハたくらり酔(ゑひ)をも此下戸(げこ)上戸(じやうご)共茶の湯の時ハ乱に及バず
あハたくてハいまだ酔をかくる者よき婦(?)まハ多ぞ
先一此とれ
猶らずハなりじと思ふ世はに心つきてと居ざるを一しバ
身と井(い)戸(?)麗(れい)座の帰を清(きよ)くなりぞうし
茶の湯の内の深く成ル事も同じ
此道の間(?)はなけれハ汚さずや上手(じやうず)と親(した)しむ事ハなし
九盤よ人の心得ハやりうかり
すなはち一盤だとしてなきとの
一 茶菓子に含てハ紙に残るすこぐらいき事
まるこはたりまでと楊枝に付居へし

一茶碗にのミ口といふ所を付る事ハ初心の人の
さばく茶碗の数に依てのミ口六ケ處迄有侍
一濃茶とのむ時に上座中座末座茶碗を廻すハ見苦
敷事なりしハまはし呑廻しハ子細ハ茶もれやすく
と能せんが為也
一ちん風炉へ火入時ハ炭を富積(フキケン)ヶ又ハ一当事
し持手へあてて行ならバ時宜とあく繕へして置
ばかりにし四畳半非常にて所に在
手数を大にぬしつけなり
一自然行家と第ハいくつ何をと数へ飯(カヘ)し
人か見たる間如何なり

一雪隠(セッチン)ハたくたく路地にいるハむさとハ居ざる
ものなりまづ当座ハ新敷たいるものに又掛込(ウヘゴミ)ごみ
にいるがや好きれ雪隠に塵をもち入る事通
一庭舎の時たんけいしあんごうし客此外にいふ
事又ありしを見事時ハ手燭をもて見る
一刀掛(カケ)此下脇(ハキ)石に手燭(シヨク)出す事也此時ハ客数
あら座へ持く入るなり
一茶入茶碗名物の品ハ口すゆるきくるる事
なし自然見ることを又いく通ならバ大分なるがつけ
一中立にて手水遣(ツカヒ)に出る時風吹きなとひしやく落
やうき時ハ手水ひしやくをとうにすぐ仕と置く

りけわくと

一中立にて燭うけ人出る時燭うけの角に(スミ)座(エミザ)付居
上座が脇に見て我居る所にて上へいざりよ
くとらくよるに燭をうけとる八其礼ある
一右之座付を中座下座の人出さるも(ナヲ)皆いざるも
時ハ座付にもも付いざきて上る也
一主人ぶ供の時ハ主人燭うけ人ゟ上る也ゟ時ハ我
ハ下に居る也上ゟ一帝と御亭の時ハ我ハ座組
のよまさくとはくだいてゐるがよし
一立炭を好(ユルニ)くにて亭主する時ハ釜の出入るの
つまたり時り(イトマ)あで云出入るのまて〳〵ハ可し

一先師常に咄ハ小遠云ハ何(イヅ)ごくても立炭を
おに好(コノ)まるゝと云事ハなく濃(コイ)茶すけと茶
入を出て後炭を置に釜上ると
は拝を知るに釜ハいけずくこして後がけ
おくく利高成に流んきハゆくめはもな炭ゆ
付と人とおら名ハ回好くて暇(イトニ)にやあり
一先師茶より常にハ茶入ある香合(カウバコ)にも
外何にても暇を致(ツリ)ずに用利(メキ)なくとして何
にても云ハ大きを成ても又老人なと月がらをうけ
はみいにすきるをへよろしかゝるひかいとかい
子細ハ茶入にし香合なるにさてもとつてろひ

亭主まへ行る客之手を見出して亭主ハよろしき
ま也ていまにきをやがる也之を致我吾ハ不
まで下よろしく吾しくひざを畳につけ行り
の方へむきて見るへし此茶入ハ此ゑんいまだ
見とのお鏡をせまるがすし此たしかなくハ心
不通理ニ叶ハ也
一 亭主を亭主上ニむけ候とこふ也亭主此臥具をこ
ハ亭主へ対(タイ)して行ハさん也然たる新茶をいる
どこす布(カツ)る客あり二見しぞ故ニ見え支へる
左き茶とし时ハとる盆(ヒ)を手ぬく茶ハ利休茶ニ
ろう候み又时代(サイ)地を向と宮へハいろよくし左き出

視た横ニて座して一の茶と云ぬ手をと茶筋之て
手前水指の蓋をする時之一し
一 茶人の手を取る茶をたてる時ハ茶と云
を中次す切にし上を帽巾るまき明(ドウ)ハ手せを
行くたるまへし蓋一して綱ハ茶をすぎさり
又ハ一文字ニ入る故行くれ行く入ハらぞるとし
手故をも置して行くのとし
一 茶入之候を見る丈ハ先ハおき支之手綱ハ新切(アラフキ)
見どをこうりて座をすする事也去ども見
支丈る左き茶入見とある時ハ候ぬし待向し付ハ
候を之也手故茶入之出し行よ候を之し伝ロ

一絵讃のかけある床に入る時ハ初に大事此事
にてまづかけ絵ハ先に風帯中一文字と見て
扨絵を見る也讃を見るゝ子細ハ讃ハ絵ニ
依てする故之口伝

一茶此湯有ハ香を焼しも式ニ綸徳井手べし
香此茶の湯に出時ハ不入也又行ばさんざんにて
たしなむべし

一茶帛巾をさばひ中すべし其人のおる入也
又ハ晴さの入時とさざ也ハ其事をかくして行也
又何ぞぬぐひ事掛べし茶湯にハ居布
此ニぬぐひ緒之布ハ常にひらめる故也

亭主振舞給六ケ条之事

一数寄屋ニ皆く文戸をすべし是梅戸能と
云ありハ時ころぬき入故に常に右又庭付
月庭是也ハ門此方をつらくすべき也

一史記ニ目舜崩於蒼梧之野ニ帝此二妃ニ
娥皇女英かなしミたへ泪を竹にかけ
竹ニ哀をまつりあると此葉竹
是也故に茶之湯此所其に遣事又ハ惑し
熱して茶之湯ハ不統繊ものとききし故
なり世に多く葉竹を故為心得紀す

一二役竹ハ竹此根ニ七分龍迄ゟ統き故

大番ニ不足よ遣す文きろなる也
一法躰ハ八法と云物を着也ひらへ脇之急ハ人々の
おすき袖ハ付脇袖よして通し名乃也
すそハ服の方へ尺あまりを略就之
一八法ハ上ニハ赤帯をする者ある結ひまき此物襲
此如く法衣をおよ剃り付げる之
一十徳ハ茶を點る時ハ着る巾を腰ニ下る也十
徳此お付けたるが善し
一小遠云伏尺此圍ニ中柱をまけて其柱之下棚
と上棚此有ニ大なる如くべとすうしる也去仁お
諱也其柱の内ハ此心を理ニ叶ふ又其方り

小遠云此お殺着ある上下此棚なしよ下棚此不
よろしハすれ柱と一文字よ釣りて其文を理ニ叶
一類向此石と云物ある是ハ侍合此向中ニ有此花
遠よりある也やうげくと云子細ハ云ハれ此方にむ
くひよ出る時友よ出る場故よ云
一御成此時客ハ茶此時までつたらなる
く刻みの上下を刻みをきて出るが式正なり
一云家名ハ一ハすべて其天目也濃茶點るニ貴人
として服點也子細ハ高位方ハ其茶ニ為をまく
しき故各服也加賀中納言度々江府ある八象
之宗旦御相伴之時其作法也先師何知も付

此台子おとし勤たる人也為茶に台天目
也台點極ハ是ハ此台子のかくされ點なる也
一 公方様へ紹鴎御茶上し時義政卿此御様を
御らんハ台子を極め御茶たて御様物様見ん
仕合由申上ル時御心きゞくと思召御にせ給ふ
紹鴎様に数寄者としたまふ依是此世中に茶
之湯の作法と云時ハ人ほめし也
一 台上に夕会とし毛客に坐に盛物を多分花を生
又利休流の口傳に申ハ小座敷ハ客入
多分とうけ中立に花を生る夕ハ客入に花を生
けよ多分とかるる也

一 盤とうけおきに鐶かざる事もあるもあし
うけて文字ハ口あるひとしてかざるもあり
又ハ壺を籠へ入かざり荘る事もあり壺此下
之ハ必小掛物にもかざり入る也是ハ又壺を客
にも所望する事あり壺の口じめ此緒を
とき上此置ひと客るる客へ見せする事也
一 釣香炉に此床につけ向に多分をかるるす
又ハ掛中立の時花かざりするとき又多分
しに釣香炉かざり卸めにうけ所多分とるとて
花生一ツ不ニ置事なる
一 ...

𥿻の方に持てたてうけ盆形(カタ)染の元来かり様に
古宮ほでまする時には宝出かけ物笄(サウ)持ぞ
候へかゝる事之候花生る事之又うけ笄(サツ)持

一 お客へ出しもして来ありへうけきたる事有り
お前乗船(ニユウセン)門出(カドデ)の茶の湯にひとくらの祝まゐらする
こ初吉(キツ)也 設ハかざりをもあとをぬくはらばずきは
水桶杓を同前

一 有人の日膳(セン)の内にして搗上て楊枝(ヤウジ)ぐり
進し葛子(クズコ)の絵(エ)讃(サン)とうけたると親

一 庭にうけ物とうけ下に盆(ボン)山をかざる事有り
む盆山ハ盆にのせる白石(シロイシ)砂(スナ)を置き盆不ある事

十八〆盆山に立(ヨフ)したる石をかとる事東山殿之一
の町秘蔵(ヒソウ)の石残雪(ザンセツ)といふハ七ヶ石なり龍安寺の門主
よりゐるよし也廿七寸大方なるサ三寸高さ
なし伝へ為も石の寸法の事なり也

一 却して茶の湯者ハ二斎にたとへたし名むつきから
東山殿之御此方(コノカタ)小遠云まて皆斎に道(ミチ)人へ
千円に右織部の斎中に御座候盆え大坂にて行
桐斎西殿へ茶の湯の時接待に進らせ茶の湯之祝事(キウカ)二
未明より石をせらくお茶の湯のため嘆き接待する也

一 茶の湯者ハ心持ときは一つの持之能雪(リウセツ)に三茂
の月とりを繋(ツナ)る

月よあもりよいふよ老そく人よ常るも、おとしらゆさ行べ
名物の茶具并よ卓の所作の事時節其の心持一段
ひとく作法常よ守るべし

一或人の云
茶の湯者ハ古人(コジン)の道を知るべしよ一の事心ひろく
茶の湯者ハ普請(フシン)の事をおろそかにしきとの心の心
聖賢(セイケン)の道の如し然るに茶の湯の道ハ愛敬(アイケイ)の事となる也
世の人の茶の湯ハ人の心をよくしとるよハ人の常をもしるべ
茶の湯者ハ慮(ヒロ)く志るべし世の中八目切間(ゴウ)切、鳥切、刀(ナシ)切

一金の物焼(ヤキ)物の数(ルイ)よ来の品よの付たるよハ扨よつけ置
僅か申し人ハ扨にても付也、さとくひ扨ゑバとも候

おつるやう物のかろき事ハ先よりいろくおとし候ハ
何事ごとも外ハあるべし

一夜会の時短檠(タンケイ)の置処ハ座の右の方ニ向ふ
メ膝(ハギ)七メニ置也角へ置ハ居座も置也大目
ニて水指の通り外の置て置所(ゴ)ハ二メニ置也
炉の角へ火先(サキ)を向て置なり

一短檠土器(カハラケ)紙の笠(カサ)焼土(ヤキツチ)五分ヶ七分焼土へ置(オガ)く
こしそはとの穴よりも通首(ゴ)ハおくと焼土へと下へ
さげる小遠(ズ)公八穴の外ぎりよ切たるおく下皿を
前の内よ油(アブラ)入を入置かきたて下皿の内ニ置火を
消たて人時ハ下皿をおへ置しる、たく人火

うゑを忍ぶへいとゝ色すゞしき為也かき立手ハびいこ遮
一灯籠ハ木の地にする短檠ハ足のうつするなり
一宵ハ短檠とこぼるゝ灯ハ灯籠とこぼれそふ細め
何とさせハ宵ハ風なし明けハ待あかしける故也
一貴人孫なとを庭へ入すいなれは庭ハおもう
事ふ自由なるなり又ハ脇かげんもちびこえはこ
置もの添ける也並ハ行きと常に組路の節由
一庭へ入ハ路地より不浄なるなり水ふらんとり
ぞうれとおよひふらこし庭中ハ拵へしる
りよし石の凡くとめとの人をしける故に
一石燈籠ハ頃建の為とて行る事也門路地ハ日

月の出横月を気よ出外路地ハ月を気に出遮
む道通の為にする横よ出也
一小遠二の路地の石の鉢ハ出石にして亭主人ほとる
下其石の凡にする横よおちる路石ある名人の
のくの門の内深き故に見かとげよりして家
深くなるたり見之地ごけを付離れ笹なりなど
見をよ水洗ある一筋気有たるなり也
一茶色口を見て枡ほを出よ八茶色口を火焼
けよすりくある心を定めなき事を置き為也
一主人のかる路地をつけ中る作時ハみつけ
ひがくとするか日中主人洲路地ハいかなる

とりて附文あるを出す如くかきたる人に一寄知
也文を人につけ候時ハかれ申ごとく何方に緑に花
ほうより紙也紙宮お茶の湯あるかハなく色紙
ごとくを人ハ此心に叶と不叶と此口指南す一と先
師家より伝ふ口伝
一附成文ハ貴人ある位を戸入ては寒気此時ハ
口に湯を入て文を持出より縁の上に置文を
習より指て出しつけさせる事何方を
一今此世より此鉢此状諸状を中ほどを取て
ありたるをうけ右肘をよく多く何る事何[十に]此
為ほどハ宮を天此時ハ此ハつかひき故湯を取つる

出したる文を手紙何口より湯を入て手まにもちを河に
叶事也
一数寄屋へ客入て茶の湯すること有解る時まお
掛け(ハ)出て礼をたがひにするて主礼を
心札(ウケ)文をとかくする附札より客の一用有所に於
一文ともに用るてハ主状のかの札をひろうする
此礼ハ大なる所の開法也
一風炉先屛風(ビヤウブ)表の扉風此に色紙(シキシ)継(ツギ)又張(ハリ)文
紙也子細ハ床より墨(ボク)跡(セキ)色紙を此のかる故
也指合て悪しきに此為也然れ屛風之事
習するがなき式也

一式正の茶の湯にハ必茶菓子(クワシ)に水菓(クワ)子を出(イダ)す
餅(モチ)菓子ハ膳に出し膳に水菓子茶菓子吟(ギン)
後段の茶に先にて出し後に餅食し
梅水栗を挽(ヒキ)て出す食事一の習ひ
一水栗の式正の席むき様ハこま〳〵とつぎ
ちひさく切て水に浮きてさす
紗にまぜ一の習也
一麦ハ風炉の時の茶の湯の時出る也障(セウ)子(ジ)明
茶をたてゝまで出て茶を点る其上茶
道(ドウ)口の戸をあけたる時ハ引(ア)着(ツ)き故むかし
涼菱を出す涼茶をたてる也

一麦の風炉の時ハ踏上りの戸を入戸をしめて障(セウ)子(ジ)を
たてゝあたりを見る也又ハとぢたるにするもよし又六
びいざろぐとるかたりたるもよし
一飛石を路地に打るに習ハ石の表を外(ソト)の方立
して打る也又手洗の前の飛石ハ表を手洗の
方へ向て打る
一古織云の数寄屋の柱ハここの内にたんぼぐの
まと挽ふる也又ハ花もさし置して数寄屋へ
こひの座にハ花をさすを嫌(キラ)ふ此柱に山鳩(バト)を
かけるも此内に出るかりせ打ふ
一雪隠の紋ぐしの砂古ハ隠の板にてまちかけ

事也小遠州の雪隠のくゝし砂ハ雪隠よりくゝを
置上て打く也是色頭がよし隠を置りけ六枝ニ
砂此所と手見苦敷なる也
一雪隠ちり穴ハ九寸此門六寸松葉入る事上ニ記し
時此木此葉を入る刀掛此下此ちり穴の門なる也
一小遠州此障子ハ数寄屋より又ハ手洗しもた
也此障子此ニ也引段障子此下ニ窓有何何も門此
ゟとちる寄居ぎりと友ごゝのたまと安き故也
一小遠州数寄屋よりハつき上窓大月の上ニ有り在家の
事中ニ二ツ刀掛此上ニ有り二段障子縁此上ニ有り
此上同ツ也

一此奥小諸事の題を書事ハ達人之目出ハ
祝ハしきちよう近江二可承及ぐる事を記し若
ちどひ行く八誰板と加筆すべき類也
一或問茶之湯ハいづれ此ゟ始る分て其子也
貴ハいつ頃なる事ぞ二答唐より日本へ
渡る事ハ亀山院文永之比也
初祖 達磨 二祖 恵可 三祖 僧璨 四祖
道信 五祖 弘忍 六祖 恵能 南岳 馬祖
百丈 黄檗 臨済 興化 南院 風穴 首山
汾陽 慈明 楊岐 白雲 五祖 法演 圜悟
虎丘 曇華 咸傑 松源 運菴

大宋国径山寺虚堂智愚和尚是ニテガ唐僧
日本国筑州崇福寺ノ開山南浦紹明和尚ヲ
勅謚圓通大應国師ト云 正元間航海至ル
大宋ニ、径山寺ニ嗣法ヲ虚堂和尚ニ而帰朝ハ
文永四年也 亀山院ノ年号 北条時宗執権時ニ當ル 在大宋国ニ
十年皈朝ノ時筑刕ノ興徳寺ニ入寺ス文永七
年ノ秋移ル大宰府ノ崇福寺ニ居住三十年嘉元
甲辰年奉ニ詔京師ニ住持ス万寿寺ニ 亀山院文永九年創ス
徳治丁未年奉旨鎌倉巨福山建長寺ニ入寺ス
延慶元十二月廿九日ニ示寂七十四歳
一 洛陽西京教建寺ヲ瑞鳳山龍翔寺ト云今

紫野龍宝山大徳寺ニ移ス開山宗峯妙
超和尚 花園院後醍醐天皇ノ御帰敬
右南浦紹明和尚入唐の時径山寺より台子
を一荘て皈朝崇福寺に数年有之後
京師紫野大徳寺ニ被納る尊氏将軍ノ時
天龍寺ノ開山夢窓国師右の台子を用ひ茶の
湯を被始候より武家へ出るなり
一 或問日本にて茶の湯始るより是まで宗匠と
謂くと云ぞ 予答 或書ニ 鹿苑院殿義満
普光院殿義持 慈照院殿義政 能阿弥 松本
道貞 宗訖 志野 後光 紹鴎 利休 織部 遠

州トなきコトガ国及たるハ夢窓国師　等持院殿
なる民部卿　宝筐院殿義詮　鹿苑院殿慈照院
殿別而此代茶此湯発向スるを東山殿と云　能阿
弥相阿弥　宗珠　珠光　引拙　紹鴎　千宗易
利休居士　古田織部殿　小堀遠州殿などめでたき宗
匠也其外にも名ある人ハ宗匠と八雅観

一或問茶ト云文字ハいづれ此世より初るコト答本草
之疏ニハ以茶ト名せ昔ハ茗ト訓ズ其後茶ト云本草此
義ハ如斯するよし又塵芥抄と云書ニ云天竺国ニ
耆婆大臣一人此娘を持他国へ用事有て供をつれ
よかれ娘旅路ニ死ス耆婆本国へ帰て娘此事

を聞死たる事をすさ大ニおどろきかなしむ平常
有合せ療治せざる事を悔ひかれ娘の墓へ
薬をせんじけしも其次の年娘ノ墓ニ何ともしれぬ
木生へたりこれ其木の葉を取て味ふニ気味よく其
葉を煎じ用ゆ又引て飲む度娘此年死た
る時其歳也其故ニ世此人の木と言て茶ト讀
むる縁也又艸人木ト書するも其縁也

一或問一切食物此中ニ茶を第一とするハ如何
なるゆへぞ　コト答能ふ審せ五臓よハ五味の
食物有心ニハ苦ガ食物肺ニハ辛ガ食物肝ニハ
酸ガ食物脾ニハ甘ガ食物腎ニハ鹹ガ食物

如此さまさまの食物を料理にすし何まきにかけし
其外なとの菓子物ハ先へ出し苦きものとはふくみすゝむる故
食後ニハ心ほとまでよくなる也茶味苦し心食物
也と故ニ食後ニ濃茶を飲と云ハ式礼也又貴
人ある位の人ニも薄茶を上ると云ハ心の膿をおし
ぬずる心也

一或問宇治の茶ニ濃茶薄茶の分ハ如何ニ予答
極上と云ハ濃茶別儀と云ハ薄茶也極上の内か
ら出するを極かと云別儀の内より出するを
別儀かと云ハ次を上かと云

一或問濃茶を極上と云ハ何也薄茶を別儀と云ハ
予細ならぬ予答珠光ハ村田総髪香ニ茶湯を達
しよ其頃のまで指すぎて茶のみくによりて信楽
ヘ宇治へ申もしむしをそのとされし也是より
珠光の別儀ニ作下とて薄茶の上を別儀と云

一或問宇治の極上を半一と云心如何予答極上を
作ハ茶目弐百目也是を十ニ割てその一を袋
云然ハ茶目弐拾め也是を袋を二つニする故半
一と云也袋をまはする故也

一或問四五を半ノ代とす代ハ何の比より始るぞて予答四
五をまの代ハ東山殿義政将軍之時始る四五
すと云の所さ代おして中の間の其中ニ一尺

六寸の炉外角にして中を丸くかこみ天井の高さ
中に天びきをすゑ自在をかけて茶の湯をとゝのふ
しき分を畳と東山銀閣寺に昔の茶屋あり
向ふに書院床三尺の下ちがひ棚を付たる間也
紹鴎の時よりハ廿なる炉切炉也利休の時分中
のすみの角へ寄炉をきる事にし居丸
六尺までの方を今の世に用る也
一或問数寄屋と云ハ圍と云ハ同事の様也いづれに
候と答て云又ちいさくひろきや茶室数寄屋と云ハ
屋敷の内に分に家をかまへて建構て人数
寄屋の次に建を云圍と云ハ家につゞけて縁
のきハや又ハ其外の脇とかこひて茶點所を付
たるをかこひと云
一或問長板と云ハ何の比より始るぞ答曰長板
ハ于宗易利休居士之作れる処也先利休を申
古宗匠と云ハ紹鴎の時まで八寸茶の湯
上人の代とて好ひ物も有とて下の者の丸扱に
とるかし利休侘となしけれは為に其の天井
の板を取て下ねこをのけ風炉釜をすへつけて
其外其の飾を用て茶の湯を始むるよ
是長板と云又ハ出来あるなり
一或問風炉ハ何の比よりか出来なぞ答曰風炉を

大円の謂也

利休は作く長板ニてハ道具数(カズ)故長板は下板と
申(ハニ)ま切大板と云是ニ風炉を置けれは指と
壱(ヨキ)合茶は湯を沸し候大板を小板ニ直(ナヲ)し
とれ小板是也風炉なとを大焼(カハラケ)ニ切りなとし土器(カハラケ)を
置所(イ)とする事也所(イ)ニ居ると云は其ならハ風炉
是なり

一或問中柱ハ何(ナニ)の為(タメニ)御座るぞ　予答利休風炉を直(ナヲ)
し時左(イミニ)より見有来る台子を私として思(ヲモ)ふ人
恐(ヲツ)き多きとて居間ニ人居る事なる所ニも
先ニ台子を置きてめのける其間(サンニヨウ)ニして一尺五
寸三歩程焼(タクミ)だけにて八七寸三歩ニして先とりく

つけまはしは久べを付て台子の三本の柱(ハシラ)ハ何る
心(ロ)也と云本道するニ付中柱をたくたるお
ある台子を表(ヒヤウ)ある物也

一或問此作は下とにる寸法多く有ニかとり
是長天九寸なる又ハ弐尺そ内は寸法ハ弐尺壱寸
ある台子細(サイ)ハ否(イヤ)定(チウホウ)法有やなやコア答ゆれ
くよ寸法かりる八根なと長知故也人は指(コシラヘ)た
寸(カタ)私(ルヲ)る見(ル)出へ寸法定まるならしコアか寸法
八根な台子は唐よりまするたけ弐尺弐寸之
台子を申したる物故外は寸法ハ是写す也
也ると申へしん作あるへし

一或問炉ニハ何ノ比ゟ始りけるぞ答昔ハ
半ドニ囲(カコイ)ひせぬ程ハ建(タテ)風炉ニて利休茶ノ湯
成し給ふ然ニ或時ひ炉ひらき置ハあまりつ
よく過上佗(ワビ)人ノ茶ノ湯をする事を広(ヒロ)めん
為ニ六寸四方ノ炉を切らんとて客居の
たゝみを八寸ほど先を一尺五寸八歩ノ処(トコロ)ニ炉
を下へ切入たるを其時ハ大客居の畳をも居
たゝみける故ニ其畳を半畳と云名出る所也
して客居ノ畳ノ向ニ躙(ニジリ)上りを付たる客ニ
人をよびて食をあはせて汁鍋(イナベ)をかき
向ニ付て佗(ワビ)をおもしろく世ニ見習ひて発向する也

一或問炉を外のりを一尺四寸と定る事ハ天下一ニ定
め大なる不審(フシン)なり大なる時ハ炉ぶち土段(ドタン)にて大きく
とられ又小なる時ハ釜ノ為ニハ脇すきにて悪(アシ)し
然ハ大なる釜ニハ一尺五寸ニも六寸ニも又小なる釜ニ
ハ炉も小さくすべき事なるニ釜ノ大小ニかゝはらず
一定ニ尺四寸の定法の極(キハマリ)たるハいかなる深き事にて
有か答能キ不審也まづ釜ノ大小ニ
よらず定むる事也古(イニシヘ)紹鷗の炉よりも外紹鷗ノ
時まてハ一尺五寸ニも六寸ニも作る事也利休より
定法ニ定(サダメ)と云ハ台子の下ノ板弐尺八寸長サ一
尺四寸をくせたる板を弐ニ切たる訳なるべし也

もて故寸法も尺五寸八歩ニ建定せ然ハ定法是理ハ
一或問角棚ニ釣事ハいかなるや又下棚と小
して上棚と大ニするハ不審也して物ゟし理ハ
下と大ニ上と小ニするが通法之数寄屋の角なる
と下と小上と大とするいかなる子答棚と二
重ニなし上ハ下なるニ云故事ハ繊事なり
上のなるニハ上る道具を口伝下棚と小ニして上
なるを大ニすると云事ハ太なる故口伝
一或問二重ハ大の出来る物ハ何の比ぞ子答曰
田織部の作也一重ハ中ハ何まで也せバき故中柱
の外と二尺の入て武重を茶寸法の外へ炉を出ス

心ハ内ニるハ炭もよく内へつまる故外へ出スと
手故武重ハ九重也二重ても六尺五ハ不足二三尺
よハのびたる故大目と云手ニよりて二重と大目と
云と目の字を略する也
一或問炉の角を四方ニ切事何の比か初るぞ子
答利休之作也手尺四寸ニ炉と也し中の丸き
形を四方手寸定の土壇ニして昔ハ大かた丸き
炉のなるを事と思て灰ニる四方を切也
一或問袋棚ハ何の比よりか出来たるぞ子答曰
子をなよして出く作る手内ニ袋棚ハ紹鴎の
時より初る中棚と香棚と云紹鴎よりよ

ものゝ名を八大黒唐とよぶ事也八茶會物よ八秘事と
一或問云 唐物とかゝる事ハ何の世よりも称る事こある 答
唐も安此識よりも文字の流おちたるを尽く
墨物称る文懸物と号よかけると云事出来する也
一或問云 茶の湯よ八墨蹟をかけて得とうけ
たる八いかゝ様の事ぞ 答云 墨子の出処 禅家
よりも出て世よひろまる故ニ 一ニ禅家を貴故
也 分けて虚堂の墨蹟を貴ハ 紹明和尚の
虚堂ハ師匠たる故也
一或問云 四幅一對ニ幅一對と云事ハ何の謂事ぞ 答
唐ニテ画して琴碁書画と一對よ書

たるよりも和しも世よよ類して三幅一對ニ幅
一對ニ云 云葉出より當用ハ五幅一對よりも二幅
一對と云ますゞ
一或問云 春日卓と云ハいかさき物ニて世よ秘するも
め何ニア 答 春日卓を世ニ調法よするハよう子細
あると 春日大明神の御おん御膳の下の臺を卓
と云を 廿一ヶ年めくよかゝる事もよを求た
まる人ハ春日卓とも秘するも故か得たき
物なりも 唐よりも多く渡るを卓
臺なりも中央の卓ト云ニ文唐ニ渡りけよ膳の
みぞ八足三足の名物ばよまする物也

又なが皁ま〻皆朱黒ぬり又ハたけひきくよ拵ま
貝ゆつ〻唐ゐるも床ニ荘るとみえたり
一或問床よ花を生る子細ちや予答曽大伝よ
春比始ニハ必趣を盆ニ宗得方ニ向く天も地久
こ趣をお卸ゆ〻し時ゆる時大子趣お給ふ下よ
出ゆるすと志うしめさをおく給し給ふ大王ニ
おどろきおころ忘を〻ひも趣を立まして是ニ
花を結付かれむしを甲ひおふたまつ床よ
花を生るとふ忘が初る口伝
一或問薄板を敷忘文ハ如ゆニ予答曽延喜聖帝比
春比花比人くらる花御覧たるを給ふ法

床ありゆる花を掛祈まてをたてバ其枝々加は
忘ニさゆりゆるを人くそんとすまハ々りさぬ於
袖をゆまでて之を奥へせち〻勝給ひ
下ニ敷花を上まよ折ニく盃給ふを世人みよ
花比下ニハうと板をなせ
一或問茶入ハ何比時よりて有予答遠き昔ハ池を
入たる物也中比唐よりて唐人来く焼物を初む
唐比土をかれ来く肩衝六拾六焼て日本ニ字六
ケ出へ恐と秘遣又是を唐物比肩衝の名物す
昔はとハすくなくありて天下名物秘よのてよる
八卅肩衝比古文也茶入で大ある物也古比唐人

飯を盛ものにて目なきの門何ぞの石に土いろいろ也や
こゝ等しき美濃の国瀬戸と云所に土を尋(タヅネ)
出し有る焼ものを古瀬戸と云是も名(メイ)
祐より入也もまた瀬戸にて中古(チウコ)の茶入を焼也
一或問天目ハ何を能とやいふ答天目ハ天目
建盞(ケンサン)とて上とするもの外にも多くある建盞の出
どころハ昔唐にて慈童(チトウ)と鄭経山(テウケイサン)へ流
されし時大宋の国に居る普門品(フモンホン)の二句を解(ゲ)
とけれども往にも事をもちらでして草の葉に書付
て其をもてまで流て今現在の末と有るもの
門下の出を成て焼たるを建盞と云又縁山(ケンサン)也

云右の古事由へ天目ハ用ひくハ毒を去故に信て
天目の事也とぞ
一或問茶碗ハ何を能とや何の時より始るそ答
唐にるハ茶碗(ハン)ハ食物の器物(ウツハモノ)にする日本にるハ茶碗
を茶器(キ)に用ゐ紫野大徳寺へ五器茶の茶碗渡
数是を茶碗の価一とも云ての内よりもの出
器と云が始し高麗(カウライ)よりまで渡る内に井戸(イド)の手
ことく伊羅保(イラホ)三島紙也もの外にある高麗(ライ)が渡く
よ渡る又同刷毛(ハケ)は割(ワリ)高台(カウダイ)を秘蔵(ヒゾウ)するハ
何故そ答割有る高台ハ十よ有る分一つまで子
細八十分一ふるまにするもの高麗(カサ)ある上ノ茶碗

に割る甚也くる時なるをいごかせ有まゝなるに
割なる事故世秘義する八専以此心なる
一或問茶酌ハ何を上とするぞ予答茶杓ハ古ハ竹ぞ
うけしする紹鴎此時より竹にある又問紹鴎
此茶酌ハ節なしにてと此世に扱茶酌なる
ハもし先の何答え也古此茶入又ハ名物ハ長ケ
あるく大なる事故ニ茶酌もなし節此なき
又ハ自然此曲なしけるを故に故節なし
利休此時分中ニ節を付茶入も小さくなる故
茶酌短くなる也其後宗旦此作色々有寸法
と竹に寄故定て定なし其数寄次第也

一或書ニ茶杓唐明にて始る倣朝にてハ竹昔
象牙を以く作る硴光軽く候て竹の目
此漆麺有て節なきを以く作る
一或書に釜ハ元黄帝之造也其本字鬴
口の大なるを鍑と云
一或書に茶之蓋直蓋落込手蓋と云なり
鈕にハ透茄子権此寶と云なり
一或書に柄杓之恵夫須堂庄が柄杓と作
私自今上手ト云ハ字言ト云が其也
一或書に茶筅ハ蓬莱流と云有京師畑枝
此よ太郎と作者なり

私曰蓬莱ハ御許ニる何も此数〻と多く
と心のまゝなる竹を切と云拖茶盒も我らか拵
て蓬萊ニ本ね時うけとく新る流儀ニ流ニ
一或書ニ茶入ノ成ニ文林と云ハ林檎之文也唐の高
宗帝之時紀王李謹と云者此来禽を献
したる帝大に悦び恩ごく李謹に文林郎
の官を賜故に林檎を文林郎菓と云茶
器是に似たるを以く名付くと云と
私曰古書ニも一通書有是を何とんする非なる
らん乍知道何とすまじく
一或書ニ金林寺ハはなの根を以て作るとも云

一或問頭切と云ハ唐よりもの目なきものまるものを
寺答吉野金林寺ニ後醍醐天皇の勅作に先
たるを遣せ以切の成ハ胴ハ一文字にして蓋まで
とゝのへして身よりも蓋分ハへたもあた
れね之本ハ南てんの根なるよし又一説ニ五葉松
とするとも云なる文あり
一或問棗ハ何を上とするや 答古ハ棗を用た
るを云ふ茶入に嗜何と菓器と云を用たる事
也ハ唐物ニ多く有る中奥ハ利休の作と棗を
賞翫する利休棗より八瘤ニ判有る事外よりハ藤
のけるを用也

一或問茶入の成の内文琳と云成ハ世人翫ぶをもて肩衝の次の物とせり文琳と云名ハ如何様なる心にて付ぞ　答昔文琳老師と云人門を渡って菓一ツひろひ給ふおりその薬なる一ツ細末して人にあたふ諸病たちまちに平愈す其菓の形今の茶入の形の故ひろく用る人の名に依て文琳と云菓の出生ハ不知故也

一或問志の手桶釣瓶水指ハ何者の作分并で手　答志の手桶ハ紹鴎の時よりあるほどなれども拵たるもの　釣瓶の水指ハ古田織部殿作也寸法ハ奥之書にしるしたり是にて候ハ見事候　利休のごるし桶なくと云けるなり

一或問路地の内に柴垣として二本の柱を建小さき戸の跡先に木竹を出したる戸をはる戸と云は心如何　答是ニ二説あり戸の両方ニ柱を二本建の手木を頭と下方を切て真中を一文字に切是はるの頭に似たりとて猿戸と云説あり又一説ハ奥山なる猿たにくりもおくそこを取て人を留る或時ハ路に出て人を留るを心えさる戸の形を路先ニ竹を出したる其形を木もたる形を為するは心よ很を随理ニ叶ひ説善し其故ニはる戸のちなみなり口伝あり

多メニナルコト
アリ

一或問石燈籠に火をともす事ハ何れの比からなるぞ
荅曰鹿苑院殿御庭おもしろくたくみ給ふ
一居まゝ立石の上へあげられし侍る始なき
なり去て其後ツゞきに数多くの燈籠ひろまる事
数不知に成ゆる事也 相阿弥に審に問ふに
其石の下ともし尽人にあるはいかなる訳たる尤ゝ
いとすぐなる土器に油をともすと申ゝ又石
に油まゝとすうし常に燈明とともし御吊の
ために石燈籠の始也中比より事へ利休も
とりひ出し聚楽なる藪がきの時を好めし

なりし